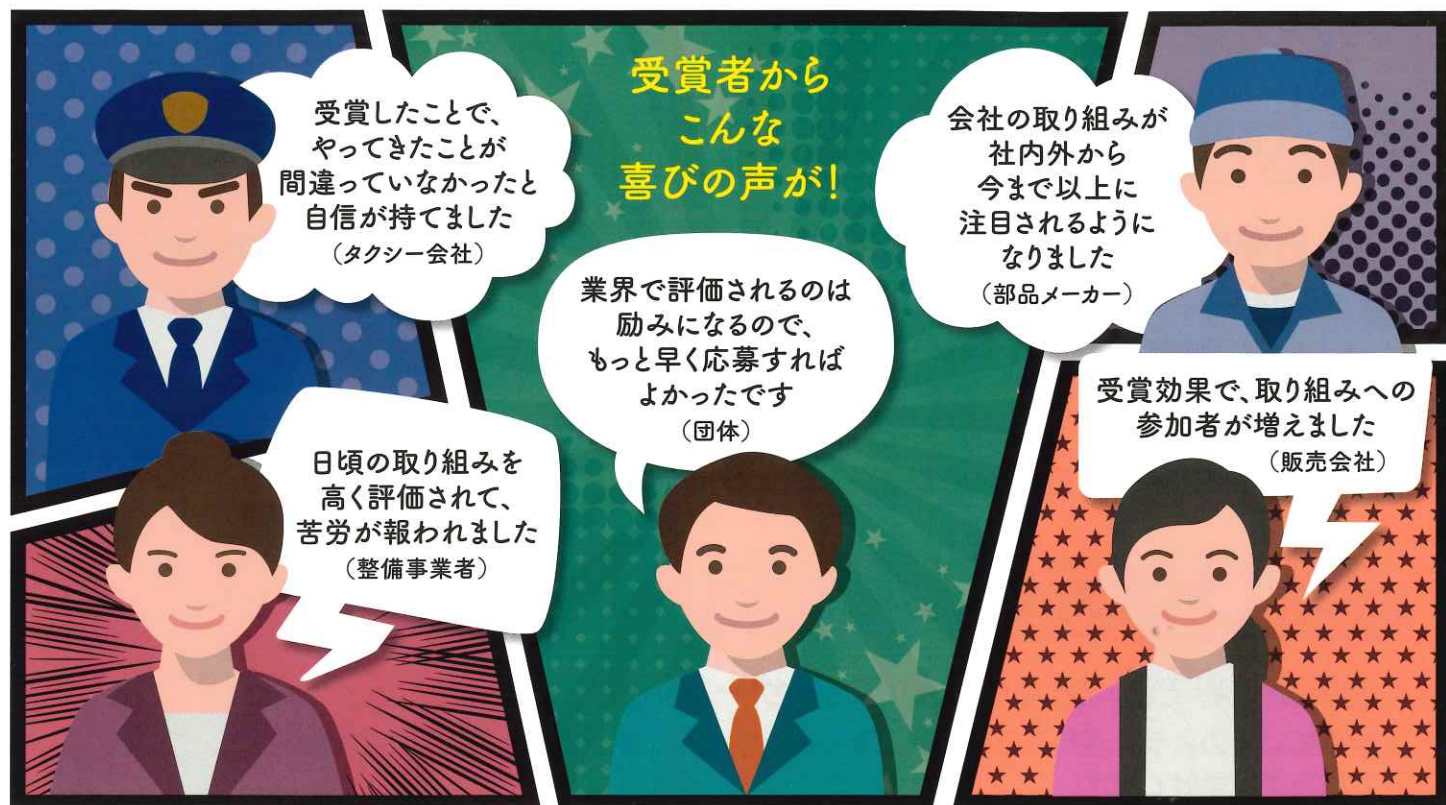




第5回 CSP大賞2025

応募締め切り
25年12月31日

第5回クルマ・文化・社会・パートナーシップ大賞

～皆様の取り組みに感謝を伝えたい～

「皆さんの会社や事業の取り組み」自慢を教えてください



過去の受賞事例は分野名の下の [🔗](#) をクリック

主催 一般社団法人日本自動車会議所／株式会社日刊自動車新聞社

後援 経済産業省／国土交通省／一般社団法人日本自動車連盟 (JAF)／全日本自動車産業労働組合総連合会 (自動車総連)



日刊自動車新聞社電子版
CSP大賞特設ページはコチラ

募集概要



CSP大賞のねらい

- (1) 自動車業界で働く人々や自動車ユーザーを含めた自動車にかかわる全ての方々が、クルマにかかわる文化の向上をはじめ社会や自動車業界に果たしている貢献に対して、「ありがとう」と感謝の意を伝える。
- (2) 表彰を通じて、それぞれの貢献の取り組みにあらためて注目を集め、認知を広げることで、同じような取り組みが拡大していく一助とする。



応募対象

自動車業界で働く方々や自動車ユーザーが対象です。

皆様の以下のような活動への取り組みをもっと世の中に知っていただくきっかけとしてご応募をご検討ください。

- ① クルマにかかわる文化の向上につながる取り組み
- ② クルマのファン作りにつながる取り組み
- ③ 新たなアイデアや課題解決を通じたモビリティ社会の発展につながる取り組み(含:教育、健康、福祉)
- ④ 地域や自治体等と協働・連携し地域活性化に向けた取り組み(含:災害・緊急時)
- ⑤ 自動車業界で働く方々や自動車ユーザーで特にその現場での活躍や貢献により表彰に値する取り組み

※「クルマ」にはバイク等も含みます



選考・表彰

25年
10月7日(火)
～12月31日(水)
応募受付

26年
1月～
選考委員会を設置、
厳正・公正な審査に
より受賞者を選定

26年
2月
受賞者公表

26年
3月
東京都内で
表彰式開催

■応募要領

日本自動車会議所もしくは日刊自動車新聞社のホームページ（HP）にある本賞のバナーにアクセスのうえ、応募申請フォームを記入しご送信ください。

〈日本自動車会議所 HP アドレス <https://www.aba-j.or.jp/>〉

〈日刊自動車新聞社 HP アドレス <https://www.netdenjd.com/>〉

※お問い合わせや添付資料は下記電子メールで受け付けています。

〈電子メールアドレス Award2025@aba-j.or.jp〉

詳細は
こちらの
URLから

<https://www.aba-j.or.jp/partner/>





地道な活動と貢献に感謝を

日本自動車会議所（豊田章男会長）の表彰制度「クルマ・文化・社会・パートナーシップ（ＣＳＰ）大賞」は、自動車産業で働く550万人と自動車ユーザーによる地道な活動とさまざまな貢献に「ありがとう」と感謝を伝え、それぞれの好事例を幅広く発信する活動として創設した。第4回までには自動車メーカーや部品メーカー、自動車販売会社、自動車関連企業のほか、地方自治体や業界団体など83社

・団体が受賞した。

受賞者からは「業界から評価されることは励みになる」「取り組みの認知が高まり、より幅広く活動できるようになった」「社員が自分の会社に自信を持てるようになった」などの声が聞かれる。

第5回のエントリー受付は12月31日まで。これまでの表彰で多様な周囲を賞賛した3事例の取り組みの進ちょくや受賞後の周回の反応などを紹介する。

第3回CSP大賞 モビリティ・ソリューション賞



大宮自動車教習所

地域の交通安全教育センターとしての取り組み

大宮自動車教習所（加藤慎也校長、さいたま市見沼区）は、第1回CSP大賞で「モビリティ・ソリューション賞」を受賞した。自動車教習所の特長を生かして、子どもから高齢者まで交通安全について学ぶことができる「地域交通安全教育センター」としての役割を担っている。

現在、少子高齢化などが原因で免許持得者の数は減少している。一方で、高齢ドライバーの免許返納も増えつつある。自動車教習所を「免許を取得するだけの場ではなく、その前後も支える場」としたい（「加藤社長」）と取り組みを始めた。

自動車教習所という特性上、入所対象とならない未就学児や小学生には縁がなかったという。近隣小学校の町探検授業への協力や自治体との付き合いの中で、徐々に交通安全教育の連携が深まってきた。小学生を対象とした自転車講義は、近隣の小学校から引合いが多い。参加したい児童には、これも自転車免許へを渡し、交通安全への意識向上に貢献している。

子ども向けの交通安全教育を行う背景には「教習所とのかかわりをきっかけにクルマに興味を持つしてほしい」（同）との想いもある。幼少期から接点を持てると、若者のクルマ離れが抑止し、運転免許を取得する選択肢を持つともう狙いだ。

受賞後、新たに子ども向けの絵本を制作した。自動車教習所で交乗した子どもたちが成長て運転免許を取って、早速ドライブに出かける

免許取得だけではなく前後も支える場に

と、交通ルールを守らない人がいることにショックを受ける。自信を無くしたりしたが、教習所で学んだこと、改めて「交通安全の大切さ」を認識する—という内容だ。

高齢ドライバーへの指導なども行方。免許返納が推奨されるのはクルマがないという課題で、「元気にドラ生きてもらいたい」というのが、高年齢者向けシニアの専任を「モ」の専任を検討



子どもたちに交通安全の大切さを
分かりやすく伝える

第4回CSP大賞 選考委員特別賞



南信州広域タクシー

EVタクシーのデマンド交通運行でCO₂削減

南信州広域タクシー（鈴木佳史社長、長野県飯田市）は、第4回「COP大賞で、『EVタクシーのデマンド交通運行』COP削減」の取り組みで、選考委員特別賞を受賞した。地域のデマンド交通、災害時のライフライン確保、次世代自動車導入促進を後押しする活動が総合的に評価された。鈴木社長は「賞をいただいたのも嬉しいが、取り上げてもらい業界の皆さまに活動内容を知っていただけたことが嬉しい」と述べ「地方の小さな企業でもできると示すことができたのでは」と力を込める。

同社は2005年カーボンニュートラル（温室効果ガス排出実ゼロ）実現に向けた取り組みを推進する飯田脱炭素社会推進協議会に属し、COP削減を目標に行動する。鈴木社長は「環境モデル都市」としてカーボンニュートラルに積極的に取り組む飯田市内に本社置くからこその責任があった」とし「タクシー・バスの公共交通と、運輸を担う企業としてできることをしかりと取り組まなければならない」という思いがあったと強調する。そこで取り組んだのが、エコドライブの推進だ。「南信州エコドライブ1000人プロジェクト」を立ち上げ、交通エコジョー・モビリティ財団や教習所などと連携し、エコドライブシミュレーターも活用しながらエコドライブの必要性を訴える。同社でもエコドライブシミュレーターを導入しイベントなどで地域住民に体験してもらう機会を設けたところ

地域住民にエコドライブの必要性訴え

「フーリエバックがあるから分りやすい」(笑)べきがエッたらから自分のクマでもエコードラライブを実践してみたい」などの声があがったという。1千人プロジェクトとして目標を掲げていた活動は、20年には1300人を超え、次なる目標は1万人だ。「地域内の1割の人がコードラライブに意識を持つとCO₂削減は一気に加速する」(同)と期待感をみせる。

同賞受賞後もカボンヌー17ヵ所実現に向け取り組みは加速している。10月には電気自動車(EV)バスを導入し、ゼロエミッションEVバスの運行を一部路線で開始するとのこと。また、日本一の星空の村として環境省の認定を受ける長野県智恵村にある阿智営業所の太陽光発電で

Vタクトに活用する。さらにクリーンな村であること、また自社独自に開発した「グタクシ」を宣伝媒体として活用する。背景には観光客だけでなく村民にもアピールしたかったという思いがある。

受賞後は自治体などからの反響も大きかったという。また、環境省の「脱炭素事業促進訪地域コンソーシアム」への登壇依頼やシオ出演などを通じて認知が広がっていることを実感しているという。

鈴木社長は「電力供給の面で課題はあるが解決に向けて活動を推進しながら、誰でも気軽に移動できる環境づくりを行ってみたい」と、次なる展望を見据える。

第4回CSP大賞 自動車ユーザー連携賞



新 明 工 業

新しいクルマ社会の未来を切り開く活動

新明業（近藤恭弘社長、愛知・豊田市）は、第4回OSP大賞で「自動車ユーザー連携賞」を受賞した。レストア事業や社会に役立つ車の考案、子どもたちへものづくりの魅力を伝える活動などに取り組みが評価された。

同社の創立は1949年。長・歴史の中で、日本初の積載車の制作やトヨタ「パブリシティ」の日車検などを実現してきた。

これらに携わったのが、自動車事業本部の石川寛顧問だ。70年以上わたる「修理屋」としての経験を生かして、さまざまな事業に取り組む。

94年、トヨタ産業技術記念館の開館にあたり、約170台のレストアを完了させた。トヨタ自動車の社長などを務

めた故・豊田英二氏から「動かなければクルマじゃない」と言われた。（同）ことを守り、必ず走行できる状態にレストアすることがこだわりだ。

また、社会に役立つクルマの制作をもう。高速道路でパブリック回収をしていた作業員が亡くなった事故を受けて、安全に作業ができた車を制作しようという案が立った。最終的にはトヨタ自動車などの協力を得て、パブリックの設置・回収を自動で行う特装車「ロポコン」を開発した。現在では、災害時などに活用する「トレイカー」など、時代やニーズに合わせて車両を制作している。

石川顧問の原点は、子どもの頃に見て見まねで「トヨタモーター」を修理して、周囲

子どもたちにもものづくりの魅力伝える

から喜んでもらったこと。「将来を決めた忘れられない体験」をしたときに感じた想いを子どもたちに伝えるため、小学校5年生以上を対象としたものづくり学習のプロジェクトにも参画する。同社としても子ども向けの整備士体験などのイベントを行っており、「種まきの取り組み」(同)は着実に実を結んでいる。同社や自動車関連産業に就職した子どもも多い。

「冤古考新」が新明工業がレストアやクルマ、社名の未来に向けて取り組むテーマ。「古いものを見て昔の人がどうしてこうしたのか考え、新

しいことに生かしていく」(同)ことを大切に、レストア事業や未来をつくる子どもたちを対象とした事業を通じて、次の世代に伝えていく方針だ。



第5回クルマ・文化・社会・パートナーシップ大賞

応募締め切り 25年12月31日

～皆様の取り組みに感謝を伝えたい～



主 催 一般社団法人日本自動車会議所／株式会社日刊自動車新聞社
後援 経済産業省／国土交通省／一般社団法人日本自動車連盟(JAF)／全日本自動車産業労働組合総連合会(自動車総連)